

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：12601

研究種目： 挑戦的萌芽研究

研究期間： 2009 ～ 2011

課題番号： 21653060

研究課題名（和文） 問題解決場面における社会心理学方法論拡張の可能性：個人焦点の方法論を超えて

研究課題名（英文） The possibility to expand the methodology of social psychology in applied settings: Beyond the individual-focused methodology

研究代表者

唐沢 かおり (KARASAWA KAORI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：50249348

研究成果の概要（和文）：

個人の心に焦点を当てた従来の社会心理学のパラダイムのもつ、方法論上のメリット、デメリットを論じ、個人の心の機能を表現する概念が、集団心的な概念に拡張が可能であるかを考察し、機能主義的な視点からの概念化と概念の操作可能性の必要を明らかにした。また、「方法論的個人主義への偏向」から脱却した、ネットワーク的統合知としての社会心理学のあり方が、一つの有望な可能性であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We considered the merits and demerits of individualistic methodology in social psychology, and argued that functional perspectives and operational realism were necessary conditions if we sought the possibility to reconstruct the concepts to represent the psychological functions of individuals. We further argued that network organizations of social psychological knowledge is promising way for future development of the field.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	0	800,000
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	390,000	3,490,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、社会心理学

キーワード：社会問題

1. 研究開始当初の背景

本研究は次の2つの問題意識を背景としている。一つは、社会心理学が実社会の問題解決にどのような形で貢献可能かを明示的に示す必要性である。近年、学際的な問題解決型研究が求められ、そこに社会心理学も参画しているが、他領域からの期待が大きいなかで、扱いきえる問題領域を拡大していくことが求められている。しかし、社会心理学は、認知過程を中心とする個人の内的過程に焦点

当て、集団現象であってもそのメカニズムを個人内過程の数量化した測定に基づく変数間の関係の点から記述するという「個人焦点の方法論」ゆえの問題がある。二つ目は、問題解決の現場要請にこたえて、社会心理学の持つ方法論の厳格さを緩めた研究が、どのような形で社会心理学の基礎的知見と統合され、学術的価値を持ちえるのかを明確にすることである。社会心理学が問題解決の場で「コンサルティング」的役割を果たすにとど

まらず、そこでの知見を吸収・発展していくことが可能となる条件を検討することが求められているのである。

このような問題は、社会心理学の社会貢献の可能性を明確にし、研究手法やテーマの拡大につなげることを試みる必要を示唆すると同時に、社会心理学の知見を問題解決に生かすために何が必要か、また何がその障害となるのか、社会心理学に可能なことと不可能なことが明示することを求めるものでもある。

2. 研究の目的

本研究は次の3点を具体的な目的とする。

(1) 問題解決型研究の貢献を整理し、解決への提言として何が可能・不可能であったか、また、社会心理学の基礎的知見に対してどのような学術的貢献をしてきたかを明確にする。

(2) 個人焦点の方法論が、これまでの問題解決型研究のあり方に及ぼす影響について批判的に検討し、その功罪、とりわけ被ってきた制約を明確にする。

(3) 「個人の内的過程の厳密な検討」という基準を緩めた際の問題点や、基準を緩めた方法論が、「科学」としての方法を獲得した社会心理学に対して、学術的貢献をなす可能性（または不可能性）について科学哲学の議論を援用しながら明確にする。

また、以上の3点の具体的な目的の、さらに上位の目的として、個人焦点の方法論を緩めた問題解決型研究がなしえる学術的貢献や、その限界を示すことで、社会心理学が学問としての誠実さ・健全さを保ちながら、その「守備範囲」を拡大する研究を今後進めていくための基盤を提供することを置く。

3. 研究の方法

本研究は、(1) 問題解決型研究の貢献の整理、(2) 個人焦点の方法論の功罪評価、

(3) 個人焦点の方法論を緩めた研究の可能性の検討の3課題を核としているが、(1)、

(2) については、既存の研究の展望、および、問題解決型研究に携わる研究者や社会心理学者と協同している他領域の研究者に対するインタビュー、および彼らとのディスカッションを中心に知見を得たうえで、その内容を体系的に検討した。(3) については、文献研究やインタビューに加えて、代表者・分担者が実際に関与している問題解決型研究での実践的検討を振り返り、その分析に基づいて検討を行った。

以上の各サブテーマでの研究活動については、得た知見を整理統合し、連携研究者・研究協力者も含んだ研究会・ワークショップにおいて批判検討し、最終的な成果へとまとめた。

4. 研究成果

社会心理学の方法論に焦点を当て行ってきた議論の成果は、下記の3つの論点にまとめることができる。

(1) 社会心理学の方法論の特徴

社会心理学は、個人に焦点を当てた方法論を採用している。すなわち、社会心理学の提出するモデルや理論を構成する要因は、社会的場面における個人の認知、感情、動機、意図などであり、特定の社会的状況で、特定の行動が生起するメカニズムを、これらの要因の点から説明しようとしている。構築される理論やモデルは、個人の心をひとつのまとまりとみなし、その中での諸要因の関係を示したものであり、データの収集や分析も、同様に、ほとんどの研究において個人を単位としている。このような方法の元で、人の社会的な行動に影響する要因を明らかにし、社会的な行動にいたる「個人の心のモデル」を構築してきた。

また、人の行動を規定する要因を、パーソナリティなどの個人的な要因と、環境内に存在する状況要因に大きく分けたいうえで、両要因の相互作用を考慮しつつ、行動を説明してきた。状況要因が行動に影響する過程の説明は、通常、状況が喚起する動機や目標、情報処理のなされ方や保持している情報の内容、生起する認知や感情など、私たちの心的機能を表現する概念をもちいてモデルを構成することで行われる。また「個人要因」として、心的過程の「個人差」の効果、たとえば、個人のパーソナリティや価値観、動機の違い、保持している知識の違いなどがモデルの一部として組み込まれる。

このようなモデルの構築は、個人に焦点を当てた方法論と切り離せない。まず、個人要因として、私たち一人ひとりの持つパーソナリティ、態度、動機、知識などの特性がある。これは、「個人差」を表現する要因となると同時に、個人に属する心の機能を概念化したものである。状況要因は、私たちに共通に影響を及ぼすものであると想定されたり、個人差要因と交互作用を持つと考えられたりするもので、動機や目標など、そのときの心的状態に影響を与える存在である。これらから構成されたモデルは、ある社会状況におかれたとき、個人の心がどのような状態になるかを示すことになる。

社会心理学が、「個人の心のモデル」を志向するとするならば、このような個人焦点の方法論は正当化され得る。

(2) 個人焦点の方法論の問題

個人の心に着目した方法論は、フォークサイコロジーへの依存を生む。すなわち、社会心理学者自身も、「常識的な心の働きに対する理解」を他者と共有しており、社会的な行

動を説明する心的過程を考える際にそれを用いる。このようなフォークサイコロジーと社会心理学の関係は下の図に示すとおりである。

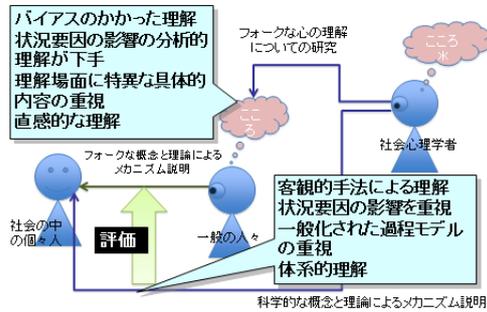


図1. 社会心理学とフォークサイコロジーの対比

これは、個人に所属する心が分析の単位であり、それ以外の分析が困難な状況を生み出してきた。たとえば、個人の和では説明できない集団の機能や行動の解明という課題に対して有効なアプローチとなりうる、研究パラダイムの典型が出現しにくい状況が作られてきた。

また、人の心のあり方に関する暗黙の仮定が研究に導入されることで、結果的に常識的な理解と整合するように仮説やモデルが制約を受けることにもつながった。社会心理学は、一般常識の理解とは不整合な、または常識からは全く思いつかないような「人の社会的な性質や心的過程に関する言説」を生み出す装置にはなりえず、科学として制度化された知の体系であると同時に、フォークサイコロジーが洗練されたものとしての性質をも内包することになった。

また、それに加えて、フォークサイコロジーとの差異化を、データの存在に求めるという志向も生むことになった。つまり、学問の価値に関する説明責任を果さなければいけない場面で、常識的な理解との差異を明確にするために、科学的手法に基づき得たデータから知見を体系化している点を強調することが行われてきたということである。しかし、これは、データの一般化可能性に十分な注意が払われないがゆえに、不正確な言説が広まる危険や、データによる現象の記述に満足してしまい、理論化、モデル化という展開を怠るという問題につながるということである。

したがって、社会と個人との関係を、2項対立的にとらえる枠組み、すなわち、個人に所属する心、そして、その心を持った個人の集まりとしての社会という枠組みが、果たしてどこまで有効なのかを、問い直す必要があ

る。特に個人の心を拡張した集団心に対するアプローチの可能性を検討する必要がある。

(3) 問題への対応

社会心理学は「集団心」を否定した歴史を持つ。しかし、個人に心を帰属させるのはよいが、集団に心を帰属させるのは間違いだということを妥当化する哲学的議論はない。これは哲学的行動主義、機能主義、デネットの主張、消去主義、心脳同一説など、主要な心の哲学の議論を検討して得られる帰結である。したがって、集団心の心理学も、個人の心の心理学と同様に、心理学以前に私たちが営んでいる民間（集団）心理学の科学的洗練化としてスタートできる。ただし、そのさい、フォークな理論内にある概念に対応するものが実在するという条件が満たされていなければならない。とりわけ、理論がメカニズムを説明するなど、因果的説明を与えるものだと言いたいなら、実在論的な条件が必要となる。

実在性を与えるような解釈戦略がとしては、ハッキングの介入実在論による戦略が有望なものとしてあげられる (Hacking, 1983)。ある概念を対象としてその働きを検討するための実験を行うためには、操作が必要であり、そのためには、それが実在すると想定する必要がある。単に予測の道具や、観察された現象を救う手段なのではなく、それを越えた実在性を獲得する必要があるということである。したがって、社会心理学は、人や集団の行動や判断の産生プロセスに介入し、それを操作し、予想された結果を得た、と言えるような統制実験をもっと行うべきということになる。

また、実在性を与えるもう一つの方略は、ビジネス顕微鏡のような集団のふるまいを精緻に観測する道具である。メンバー間のコミュニケーションの推移を精緻に記録することにより、「実在する相互作用」を基盤とした、機能的概念を生成する道が開けることが期待できる。

そのうえで、集団心に対するフォークサイコロジーを利用することが、本研究が生み出した議論からの提案である。集団の行動を説明する際にも、個人の行動の説明と同様、行動の背景にあるその集団固有の特性を用いることが知られている。この過程については、すでに、対応推論や心の知覚研究を拡張として、集団の行動説明に関する研究で検討されつつある。社会心理学者が、直接、集団心を研究するというルートは、方法論的・概念的困難により、阻害されてきたが、阻害されているルートを、いったん横において、まずは、集団対応推論研究の知見を蓄積した上で、それを手がかりに、知見の洗練化をはかる作業を進めるという提案ができる。フォークサイコロジーは、個人が日常生活の中で、他者の

「心」を推論し、行動の説明を行っているものである。一方、社会心理学は、フォークサイコロジーの洗練形であると同時に、フォークサイコロジーの中に見られる推論自体も研究対象としてきた。この関係を、集団心研究にも利用することは、社会心理学とフォークサイコロジーの密接な関係を、そのまま「非個人焦点」の研究を推進する基盤を作るために適用することでもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 豊沢純子・唐沢かおり・戸田山和久、大学初年次学生の分野別の科学のイメージ—天文学イメージの特異性、科学技術社会論研究、査読有、2011、151-168
- ② 竹橋洋毅・唐沢かおり、コミュニケーション、集団同一視、共有的認知の再帰的な強化過程の解明 実験社会心理学研究、査読有、2010、117-127
- ③ 豊沢純子・唐沢かおり・福和伸夫、小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす効、果—子どもの感情や認知の変化に注目して、教育心理学研究、査読有、2010、480-490
- ④ 八田武志・八田武俊・戸田山和久・唐沢穰、神経科学情報に関する誤信念の浸透度とその修正可能性について、人間環境学研究、査読有、2010、155-161
- ⑤ 山口裕幸、集団過程におけるメタ認知の働き 現代のエスプリ、査読無、2009、98-107

[学会発表] (計 10 件)

- ① 唐沢かおり、社会心理学と Folk Psychology、日本社会心理学会、2010年9月18日、広島大学
- ② 山口裕幸、集団の全体的心理特性を可視化する取り組み、日本社会心理学会、2010年9月18日、広島大学
- ③ 戸田山和久、民間心理学を使いまくる科学的心理学っていったい? 2、日本社会心理学会、2010年9月18日、広島大学
- ④ Kazuhisa Todayama、Making philosophy of science work. Workshop on East-Analytic Philosophy, 2011年6月19日 台北 台湾
- ⑤ 山口裕幸・唐沢かおり・戸田山和久・出口康夫「集団錯誤の呪縛」からの解放と、その後—社会心理学方法論の再検討、応用哲学会年次大会、2011年9月23日、

京都大学

- ⑥ 唐沢かおり、社会心理学とナイーブリアリズム、応用哲学会 2010年4月25日 北海道大学
- ⑦ 戸田山和久、民間心理学を使いまくる科学的心理学っていったい? 1、応用哲学会、2010年4月25日、北海道大学
- ⑧ 戸田山和久・山口裕幸・唐沢かおり・出口康夫、社会心理学方法論の再検討とその拡張の試み、中部哲学会年次大会、2009年10月4日、金沢大学
- ⑨ Kaori Karasawa, Junko Toyosawa, & Kazuhisa Todayama, Japanese Images of the Scientific Disciplines, Annual Meeting of Society for Social Studies of Science, 2009年10月30日 Washington D.C. USA
- ⑩ 大高瑞郁・唐沢かおり、親との政治的会話と子どもの政治的有効性感覚の関連、日本社会心理学会第50回・日本グループ・ダイナミックス学会第56回合同大会、2009年10月11日、大阪大学

[図書] (計 2 件)

- ① 唐沢かおり・戸田山和久 心と社会を科学する、東京大学出版会、2012、221
- ② 戸田山和久 科学的思考のレッスン 日本放送出版協会、2011年、304

6. 研究組織

(1) 研究代表者

唐沢 かおり (KARASAWA KAORI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50249348

(2) 研究分担者

山口 裕幸 (YAMAGUCHI HIROYUKI)
九州大学・大学院人間環境学研究科・教授
研究者番号：50243449
戸田山 和久 (TODAYAMA KAZUHISA)
名古屋大学・大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：90217513